

女性の仕事意欲促進策に関する経済学的研究

～働く母親の葛藤と仕事意欲～

経営学部 事業創造学科

○教授 よこやま ゆきこ
横山 由紀子

キーワード

母親の就業選択、就業意識、経済力への意識、企業における人材育成

研究概要

関西圏在住の小学生以下の子どもを持つ女性（約 5,000 人）を対象に、仕事と子育てに関する意識調査を実施した。女性の就業行動は、夫の所得や学歴、末子年齢などの現在の状況だけでなく、就業に対する意識にも大きく左右される。育児中の母親が仕事をするに関して抱く罪悪感や、どのようなライフコース（就業継続型、再就職型、出産退職型）を想定していたかといった就業意識に焦点をあて分析を行った。分析結果をふまえ、女性の就業促進のための就業意識への働きかけの方策を探った。

仕事をすることに 罪悪感

- ・働いていることで家族に迷惑をかけている気持ちになる
- ・働いていることで夫に対して肩身が狭い
- ・仕事をしていることで子どもに寂しい思いをさせている
- ・働いていることで幼稚園や小学校の保護者活動で肩身が狭い

- ・末子年齢が低いほど罪悪感を抱きやすい
- ・労働時間が長いほど罪悪感を抱きやすい
- ・周囲の母親も働いていると認識していれば罪悪感を抱きにくい

出産前からの 就業意欲

「もともと働くつもりだった」理由

- ・女性も経済力を持つ必要があると思うから
- ・働くことが好きだから
- ・女性が働くことは当たり前だと思うから

- ・出産前から持つ就業意欲がその後の就業行動に大きく影響
- ・女性自らが経済力を持つ必要性の認識を推進
- ・キャリアの早い段階で、仕事の楽しさ・やりがい実感する重要性

アピール ポイント

女性の就業継続および再就職を促進するため、出産前にすでに就業意欲を高め、かつ、働くことで生じる罪悪感をいかにコントロールするかが鍵となる。こうした就業意識は女性を取り巻く環境の影響を受けて形成される。両立支援策だけでなく、企業における人材育成方針のあり方が女性の就業意欲に与える影響を認識し、出産前の早い時期の均等推進に注力する必要がある。（本研究は、経営学部車井浩子教授との共同研究である）。